
Final Century

第零議長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Final Century

【Nコード】

N6983R

【作者名】

第零議長

【あらすじ】

2034年、アフリカ・サハラの大地に突如出現した連邦国家、その名も「森林連邦（Forest Federation）」。
その目的は「独裁政権のたわな発想に基づいた巨大なテーマパークの実現」だと国際社会から非難されていた。「Gapth Eprogent」と呼ばれている政権の真の目的は何なのか。人類は滅びるのか、それとも救われるのか。

プロローグ（前書き）

すぐ先に断崖絶壁がある。人類は、今その目を見開かないと、そこに落ちてしまうだろう。もう時間がない。便利という名の麻薬におぼれている時間はない。

ブローグ

今から100万年ほど昔、太陽系の第3惑星に、「人類」と呼ばれる霊長類が誕生した。彼らは巧みに道具を用い、複雑な言語を操るほど、高い知能を有していた。それゆえ、産業革命を起こし、さらに複雑な機械文明を作り上げるにまで成長した、いや、退化したのかもしれない。人類は、地球史上類を見ない機械文明を成立させたことで、自らのことを、「最高の生物」と錯覚し、生態系を破壊することを省みなかった。機械文明の基礎であるそれを破壊することがいかに愚かな行為であったかも知らずに・・・。

気付いたのは20世紀に入ってからだった。しかしそれでも、彼らの多くがその重要性を知らず、知ろうともせず、ただ手に入れた文明にしがみついているだけであった。一見進化しているように見えても、精神的には退化が始まっていたのである。

はたして、この種は自らが滅びる前にそのことに気づくことができるのだろうか。非常に心配である。

新国家

西暦2026年、環境破壊の深刻さを鑑みた国連は、ある大掛かりな議案を強行採決した。それは、「現在の経済システムを廃止し、炭素排出を軸とした新しい経済システム、炭素経済システムを作る」というものだった。普通ならば、資本主義国である常任理事国5カ国が拒否権を発動して否決されるであろうが、2008年のリーマンショック以降、断続的かつ長期にわたって続く不況に先進国社会は疲弊していた。さらに新興国の台頭などでその地位が下がっているのもあって、今のうちに挽回したい五カ国のどこも賛成に回ったのであった。

炭素経済が始まった最初の3年間は混乱が続き、新興国は廃止を求めていたが、のちに新興国にとっても有益であることが判明し、ほとんどの国が賛成に回った。

そして、この炭素経済社会における新興勢力が、2034年に突如出現した。「森林連邦」である。

森林連邦（英語名：Forest Federation）は、アフリカのサハラ砂漠のど真ん中に作られた国だ。「国際自然環境復元団体（略称：IGFRE, International Group For Restoring Environment）」という2016年に作られた環境保護団体が、チャドとニジェールとの国境地帯で大規模な植林活動を行い、超吸収性ポリマー8.9トンを用いて、100平方キロメートルほどの土地に緑を復活させることに見事成功した。

しばらくはその団体が管理を行い、「21世紀最大のオアシス」と呼ばれるまでになったのだが、2033年、「Gapth Ep

rogent (GE)」と自称する団体、おそらくIGFREから分離したのだろうが、彼らは5000人いたIGFREの職員をそのオアシスから追放し、約900人のGEの支持者たちが約半年ほどそのまま占拠していた。IGFRE本部は当然奪還を主張し、国連に訴えたが、苦勞して作り上げた「21世紀のオアシス」が軍事行動によって燃やされる可能性があり、さらにチャド・ニジェール両政府が、自国内に国連軍が入るのを拒んだため、半年間こう着状態が続いた。

そして翌年の2034年2月17日、ついに、GEのリーダーと思われる藤原将門が「森林連邦独立宣言」を読み上げ、首都を「セントラルフォレスト (Central Forest)」とし、正式に国家となることが宣言された。国連加盟国の多くは独立を認めなかったが、スイス、トルクメニスタン、コスタリカ、ブータン、そして2029年に統一された朝鮮政府などは独立を認め、国交を樹立するにまで至った。それらの国々から10万人ほどの移民が集まり、その結果、国際社会は独立を黙認せざるを得なくなった。

森林連邦は、文字通り国土のほとんどが森林で、新しい炭素経済には大変有利な国だった。結果、莫大な利益を手にし、石油価格の暴騰で破綻した中東経済に代わる新たな経済の拠点となりつつあった。

これに反発したのがチャド・ニジェール両政府である。森林連邦の領域はこの両国にまたがっており、両政府は領有権を主張したのだ。そして2036年に勃発したのが、「サハラ森林戦争」である。最初、両軍ともに森林連邦の領有主張で対立する相手国に攻め込むと同時に、森林連邦にも攻撃を仕掛けたが、IGFRE時代の口ボツト警備隊および連邦政府に忠誠を誓う若者たちの抵抗によって、森林連邦は両国軍の侵攻を食い止めた。それどころか、戦争終盤の

2037年10月以降、森林連邦軍は戦争で疲弊したチャド・ニジールに侵攻し、北部の砂漠地帯を占領した。

結局、2038年1月、チャド・ニジール・森林連邦の三国の間で、「セントラルフォレスト条約」が締結された。その結果、森林連邦が両国北部の砂漠地帯を領有することとなり、連邦の領土は約2200倍の22万平方キロメートルとまでなった。そして、英雄となった、GEのリーダー（代表）の藤原将門は、いくつもの新たな森林化計画を進めたのであった。そんな藤原は国際社会から、「森煩惱の独裁者」と揶揄されていた。

森林連邦成立から5年後の2039年4月10日、ある記者がチャドのンジャメナ空港に降り立った。飛行機から降りて彼は早速、今後の日程について、日本にいる上司に連絡を取った。

「遠藤さん、やっとンジャメナに着きましたよ。」

「日本から18時間か。やはり遅かったな。」

「飛行機の中でよく眠れたので、今までの残業での疲れは取れましたよ。」

「そうか。じゃあなおさら、森林連邦での取材をがんばってくれ。今回の取材は特ダネになりそうだぞ。個人的には、あの首領の藤原っていう奴は、どうも気に食わんが、まあ今回はいい金になる。とにかく、頑張ってくれ。」

「了解です。では。」

その記者の名は佐藤英機^{さとうひでき}。日本の「海外ジャーナル」という雑誌出版会社に勤めている、25歳の男だ。森林連邦の首都セントラルフォレストに向かうため、彼は駅へと急ぐ。

ンジャメナはチャドの首都だ。おとしいっぱいまで続いた連邦軍による空襲によって、町にはいまだに倒壊した建物があちこちにあり、戦争の激しさを物語っている。佐藤は日本人であり、GEの

首領である藤原将門と同じ人種である彼を、町の人間は厳しいまなざしで見つめていた。佐藤はその冷たい視線には気づいていたが、気にしていてもしょうがないと、いつも通り、そのろい足取りで駅まで向かった。

駅は、激戦地となつた北部出身の出稼ぎ労働者であふれていた。それでも佐藤はまた冷たい視線を向けられるが、気にせず人ごみをかき分けて進んだ。駅のホーム近くに來た時、ある一人の男に英語で声をかけられた。

「おい、お前日本人か？」

佐藤は堂々と「はい、そうです。」と、まるで遠慮のない声で答える。すると男は佐藤の顔面を思いつきり殴打した。後方に飛ばされながら佐藤は驚きの表情を浮かべる。周りの人間も同様に驚きのまなざしをこちらに向けた。3秒ほどのち、倒れた佐藤に向かって男は言った。

「お前たち日本人のせいで、おれの父親は死んだんだ！お前たちのせいでおれの村はボロボロになったんだ！くそつ、」

「あなた！この人は関係ないじゃないの！」

男の妻と帯式女性が彼を止め、男は不満げに顔をうつむかせ、佐藤のもとを去っていった。

佐藤はしばらくそのままの姿勢で、口を開けたままでも助ける者はいなかった。たちあがると、佐藤はたつた今やってきた目的の列車に乗り込んだ。さつきまでは顔をあげて堂々と歩いていたが、今では顔をうつむかせている。ここまで人に暴言を吐かれたのは初めてだった。そして、家族を殺された彼に対する同情の念が、少しずつ芽生えてきた。だんだんと、これから森林連邦に行くのに気が重くなる。今から取材に行く藤原は、彼らの家族を殺した、張本人なのだ。

しばらくして列車は、最終目的地「森林連邦国境駅」に向けて動

き出す。（森林連邦には、炭素抑制のために自動車は走っておらず、鉄道も、チャドの路線とは直接はつながっていない）。セントラルフォレストで、彼、佐藤英機に、思いもよらない人生の分岐点が待っていることを、彼自身を含めてまだ誰も知らなかった。

その頃、森林連邦の首都、セントラルフォレストでは、GEたちによるが会合が、英語で行われていた。

「藤原：現在、世界の人口はおよそ80億人。しかしその中で、我々の真の目的を知る者は、ここにいる6名、そして、あいつだけだ。」

「マタール：計7名、そして我が神アツラーのみ。結局、世界中が知ることになるのは、今から450年以上も後になるのか。」

「ヴァロ：450年か。人間一人にとってはあまりに長いが、母なる地球にとってはあまりに短い。」

「ポハンバ：450年かかるのか。我々の人生の間では到底なしえないな。となると、我々の思想の継承者を早く見つけなければならぬ。」

「メディロス：その継承者はどうするつもりなんだ、藤原。」

「藤原：それも考えなければいけない。やることがいろいろある。」

「パターソン：ところで、『パンドラ計画』はどうするんだ？まだ実行場所も決まっていけないぞ。」

「藤原：最終候補は既に2つに絞られている。アタカマ砂漠とタクラマカン砂漠だ。今のところタクラマカン砂漠が優勢かもしれないな、お、そろそろ日本から記者がやってくる時間だ。いったん解散しよう。」

藤原、マタール、ヴァロ、ポハンバ、メディロス、パターソン、この六人は、合計900名を誇るGEを取り仕切る、族に「GE6」と呼ばれる人間だ。特に代表格の藤原は、まさに狂気とも言えるような行動と思考で、サハラ森林戦争を引き起こした。そしてそんな

彼は、金銭欲と権力欲に満ちた、ナチス・ドイツのヒトラーを彷彿とさせ、先進諸国において最も恐れられ、嫌われる人物の一人となっていた。

そして日本から来た記者、佐藤は、そんな狂気じみた彼に会うため、わざわざ森林連邦にやってきた。今回の取材は、ほかの国から来た記者たちとの共同会見という形で行われることになっている。

「それにしても、あの藤原が、こんなに堂々と会見を開くなんてめったにないことだ。東京に帰ったらボーナスが上がるのは確実だな。」

佐藤は森林連邦の首都、セントラルフォレストに着々と近づいていた。周りを見ると、炭素経済の恩恵を受けるためにやってきたであろう各国のサラリーマンたちがうじゃうじゃいた。なにせ、森林連邦は事実上の独裁体制とは言え、21世紀の時代の覇者となることが確実視されているのだ。

佐藤がセントラルフォレストに向かうちょうどそのころ、月面では、国連主導ものと、「北極月基地」は建設の真っ最中だ。8年前から建設が始められ、今から7年後の2046年に運用が開始される予定となっている。基地の電力源には、近年コーリー・ギラードにより開発されたソーラー発電塗料が使用されることとなっており、

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6983r/>

Final Century

2011年11月14日16時06分発行